しまね文芸フェスタ２０１５の記録

詩の魅力を明かす対談と朗読

『わたしのことばさがし』

谷川俊太郎さんと対談

洲浜昌三

県民会館中ホールほぼ満員

平成二十七年九月二十二日、松江の県民会館中ホールで「しまね文芸フェスタ２０１５」が開催された。

今年度は詩人連合の担当。五年毎に回ってくる役目で、文芸協会会長を出し、講師を決め折衝して運営委員会へ提案、了承されたら細部の計画を立てて講師の宿泊や前夜祭などの世話をするのが主な仕事である。

今回の企画の趣旨は「詩の魅力を明かす対談と朗読」。対談のタイトルは「わたしのことばさがし」。劇研「空」の詩の朗読を挟んだ一時間半の舞台である。

左から　洲浜、川辺、手話通話者、谷川俊太郎氏

ここ数年、午前中の講演では、参加者は二百人から三百人と減少傾向だった。しかも俳句、短歌、川柳、詩、散文の文芸結社に所属している人たちが中心で固定化し、一般の参加者は少なかった。

今回は悲願でもあった谷川俊太郎さんを招くことができ、約六百人収容のホールはほぼ満員、松江市外や県外からの参加者もあり、若い人たちも大変多く、明るい笑いや拍手などが何度も起きる楽しい雰囲気の中で充実した全体会を終えることができた。幅広い多くの愛読者やファンがいる「谷川効果」の賜である。

後日、いろいろな所で思わぬ人たちから声をかけられた。「楽しかった」「難しいかと思ったけどよく分かった」「詩の朗読もよかった」など、我がことのようにとても嬉しそうに話しかけてこられたのが印象に残っている。大田市では後日、石見銀山テレビが特集として放映したので、更に意外な人たちから声をかけられ、反響の広さに驚いたり喜んだりした。

つぶやきが実現

谷川さんを講師で呼ぶことに決まったのは平成二十六昨年九月、大田で開催された文芸フェスタの分科会の席だった。

参加者の詩の朗読などが終わり、次年度の講師を誰にするか話し合った。数名の候補から、ある詩人を決定したのだが、「谷川さ

この文章は、文芸フェスタの記録として「石見詩人」百三十五号に書いたエッセイに加筆し写真を加え、劇研「空」会報十八号に載せたものです。会報の一部を抜き刷りしました。

対談内容は膨大な量になりますので、ここに書いたことはあくまで概略です。記録として DVD があります。詳しく知りたい人は申し出てください。

んを呼びたいけど、無理だよね」と呟いたら、「当たってみましょうか」と予期しない言葉が岩田英作さんの口から返ってきた。

岩田さんは県立短大で谷川さんを講師に呼んで講習会を開いていたので、胸の内に勝算があったのだろう。

一月末に岩田さんからメールが届き、谷川さんへファックスで送付した文書と谷川さんからの返信コピーも添付してあった。

それによると、講演ではなく、詩人連合理事長・洲浜との対談形式とし、劇研「空」による谷川詩の朗読を挟んで一時間半のステージにすることで了解に達したということだった。谷川作品の映像使用についてもＯＫと自筆で記してあった。

準備から前夜祭まで

「しまね文芸フェスタ」は十三回目になるが、その前進である「島根芸術文化祭」から数えると四十八回目になる。県内各地を巡回して実施し、毎回第一線で活躍中の作家や評論家を招いて貴重な話しを聞いてきた。それはすべて講演形式だった。みんな客席で気楽に話しを聞いていればよかった。

しかし今回はそういうわけにはいかない。舞台での対談・谷川さん本人の面前で本人の詩の朗読 ー 光栄とはいえ責任重大である。数多い関係資料の収集、朗読する詩の選択、一時間半の構成と内容、映像、進行、折衝、打ち合わせ…。

幸い、ぼくが代表で世話役をしている大田市演劇サークル劇研「空」は、七月四日に大田市民会館中ホールで、第六回「朗読を楽しむ」を計画していた ので、特集として「谷川俊太郎の詩の魅力」を組むことにした。谷川さんの詩を十数編朗読し、谷川さんの作詞で有名な「鉄腕アトム」など数曲を大田市少年少女合唱団に歌ってもらうことにした。

有り難いことに、これに至る準備作業や練習は、同時に文芸フェスタへの下準備にもなりリハーサルにもなった。

事務局長の川辺さんや岩田さんとはメールや電話でやりとりして詰めていき、九月に入ると「朗読候補作品」と「対談進行予定表」を作成して持参し、松江の県立短大で具体的に検討した。

劇研「空」主催　第６回「朗読を楽しむ」で合唱する大田市少年少女合唱団　大田市民会館中ホール　7/4

和やかに歓迎会・前夜祭

フェスタ前日の前夜祭（歓迎会）では俳句、短歌、川柳、散文、詩の代表者と事務局など関係者約二十人ばかりが出席した。詩以外の部門からは、池野、水津、安部、月森、栗原、竹治、長谷川、県から早弓のみなさん、詩人連合会員には事務局の川辺さんから案内状を出したが、会員減少や高齢化、遠隔地の問題

谷川さんを囲んで歓迎会 俳句 短歌 川柳 散文 詩各部門の役員や係り県の担当者

もあり参加者は、田村、閤田、有原、舛田、川辺、岩田、洲浜の七名だった。

歓迎のことばや谷川さんの挨拶などのあと、詩の朗読、舛田尚世さんの爽やかな歌唱などもあり、和やかな雰囲気の中で時間は過ぎていった。

谷川さんとは席が隣りだったので、いろいろ話すことができた。ぼくにとっては、谷川さんについての知識を確認し、本番でどこまで話題を広げ、深めるかを確かめる場でもあった。

どんなことを聞いても、谷川さんからは、即座に、簡潔に的を得たことばが返ってきた。私的なことでも、天空からカメラの目で眺めていたかのように客観的に話されるので、安心感と親しみがあった。敬称についても春の段階で確認していたので、「谷川先生」ではなく「谷川さん」を通した。呼び方だけでもお互いの心理状態や場の雰囲気は大きく違ってくる。

文芸フェスタの当日は、谷川さんの控え室で劇研「空」のメンバーを紹介、一緒に写真を撮り、それぞれサインをしていただいた。

本番前に谷川さんとパチリ　詩の朗読、映像を担当する劇研「空」のみなさん（田中和子、渡利章子、若狭雅子、山本和之吉川礼子、洲浜昌三　松本領太は撮影中）右端は岩田英作さん シアトルの大学から帰国中の一暁君は PC 担当。その母茂美さんは照明室できっかけサポート係り

手話通話、要約筆記や手話担当の人たちとの打ち合わせもあった。事前に要請を受け、詳しい進行表や原稿は送っていたが、それにこだわると、臨機応変なやりとりができなくなるので、「この通りに喋るとは限りませんので、要約を優先してください」と、お願いした。谷川さんも、「その方がいいですね」と応じていただいたのが嬉しかった。

対話の楽しさは脱線にある。予期しないことばが返ってきたときの、お互いの心理状態や反応、対応、ことばーそれは対談する当事者にも新鮮だし、聞いている人にも緊張感や臨場感のある楽しさを与えてくれる。

開会式の直前に、谷川さんは、「客席の後ろから見たいのですがどう行けばいいですか」と聞かれた。川辺さんの進行で開会式が続いているとき、役員は舞台に着席していたが、谷川さんは、ホールの最後列に立って舞台を見下ろしておられた。雰囲気と経過を肌で感じ取って対談に臨む ー詩の読者への姿勢と同じ原点を見た気がした。

対談・詩の朗読

『わたしのことばさがし』

対談は次のように始まった。

「はるばる島根までお越しいただきありがとうございます。突拍子なことをお聞きする可能性がありますので、よろしくお願いします」

「いいですね。答えにくい難しい質問は大好きです」

開会式。ホールはほぼ満員。最後部に谷川さんの姿が！

さすがは対談の名手、横綱相撲である。

笑いで始まった対談に一筋の明るい流れが生まれた。

「谷川さんは詩人ですから、詩で自己紹介をしてください」と言って、八年前に出版された詩集『私』から、「自己紹介を朗読していただいた。

「詩に書かれていることは、すべて事実だと思います。でも、『言葉にしてしまうとどこか嘘くさい』とありますが。聞いてみましょう。どこが嘘くさいですか」

軽い導入のつもりで聞いたのだが、谷川さんの答えは、一気に言葉の背後に広がる長い歴史と、言葉や詩の核心を衝いたものだったので、ぼくの心は引き締まった。

対談は、「島根の印象」「日常生活」など詩から遠い話題から入り、徐々に谷川さんの「ことばさがし」の秘密に近づいていく予定だった。

対談の構成について

対談は三部に分けて行った。「初期の詩」「ことばあそびの詩」「最近の詩」

それぞれの冒頭で劇研「空」のメンバー六人が代表的な詩を数編朗読した。

「初期の詩」では『二十億光年の孤独』『六十二のソネット』『愛について』から四編を朗読。谷川さん自身にも朗読していただいた。

一時間半を三部に分け、詩の朗読を、間に挟んだのは効果的だった。連続して朗読すれば三十分かかり、聞く人も退屈し、詩の印象が薄くなる。朗読の間三回、対談者はリラックスできる。ぼくには、次の対談の流れを修正し、変更し検討して確認する貴重な時間になった。

朗読では、楽しい「ことばあそびうた」を一時間半のほぼ真ん中に配置した。

「かっぱ」「いるか」「うそつききつつき」「まんじゅう」「あいう」「なんにもいらないばあさま」などの朗読では度々拍手や笑いが起こった。笑いは、人の心を開き、開放する。開放があれば集中も高まる。

谷川さんに「ほっとけ」を朗読していただくと、大きな笑いと拍手が起こった。

後半の三部では比較的最近の作品で、よく知られている詩を選んだ。「生きる」「朝のリレー」「ありがとう」の三編。谷川さんには「さようなら」を朗読していただいた。

一人前に食っていくこと　詩とはなにか

不登校で定時制へ転校した時のこと、その時の両親の対応、宮沢賢治の研究家でもあった父の影響、音楽大学出身の母の影響。

書きためた詩のノートを父の谷川徹三氏に見せ、詩が『文学界』へ掲載されたいきさつ。第一詩集『二十億光年の孤独』が世に出た時のこと、同人誌『櫂』のこと等々、いろいろな質問に、率直なことばが返ってきた。貴重なエピソードもあった。聴衆の中には、初めて知った人も多かったにちがいない。

「現代詩にはいろいろな主義や主張、潮流がある中で、谷川さんは、最初の詩集から、それらを超越して、宇宙からやって来たような視点がありますが、どうして大きな影響は受けなかったのですか」という質問に対して、次のような答えが返ってきた。

「影響は受けました。反戦詩も書いています。しかし私は、現実として、一人前に食っていけるかということが先行していました。詩に対しても常に疑問があり、『詩とは何か』と考えながら書いてきました」

ここに、谷川詩の「ことばが生まれる一つの源泉」があると思った。「何のために書くか」という問題は、同時に「誰のために書くか」という問題と切り離せない。

対象は、詩人たちか、学者や批評家たちか、社会活動家たちか、マスコミか、子どたちか、学生か、老人か　……　多くの詩人の場合、対象は限られ、狭い。長い間、「詩人の詩を読むのは詩人仲間だけ」という状態が続いている。

しかし谷川さんの対象は無限定、全方位である。老若男女、専門素人は問わず、分野も音楽から演劇、コマーシャル、宣伝、と境がない。無節操という批判がある。しかし「食っていくために」対象と面と向かい真剣勝負をしてきたから、創造的な詩が生まれてきたのだと思う。仲間内が対象の活動は衰退していく。

「詩に跳び込まねば！」とは？

谷川さんの最近の詩集に『詩に就いて』という、詩で詩とは何かを書いた異色詩集がある。その中で「私、谷川」という詩をスクリーンに投写。谷川さんに朗読していただき、次の一行について尋ねた。

「詩に近づこうとしてはいけない　詩に跳びこまねば！」

散文はことばによる描写であり説明である。しかし詩やドラマでは説明は敵である。「散文に変装して詩に近づこうと」していないか。谷川さんはどんなことばで、この一行を解説されるか。とても興味があった。

「実際に、詩に跳び込むとはどういうことかと聞かれても私にも分かりません。頭や理屈で書くのではなく、ふと出て来たものを大切にするということかな。ヘルマンヘッセの無為法です。ふと出て来たものに、いい詩が多いですね。宇宙の長い歴史に比べ、ことばの歴史は浅いので、ことばで表現できないことが多い。名称がつく以前の存在に近づきたいという願いが常にあります。」

「詩に跳び込む」ーこれはふと出て来たものなのだ。感性のアンテナが受け止めたヒラメキ。詩なのだ。だからことばでは説明出来ない。濃縮された丸薬のように、衰退した身体に効きそうな予

感に満ちている。実感としてはよく分かる。しかし言葉で説明するとなると、とても難しい。ほとんどの詩人は、外から眺めて、言葉で説明している場合が多い。

集合的無意識、詩の物語性、詩の拡散

詩のことばをめぐって、「集合的無意識」が話題になり、島根出身の入沢康夫さんもそのことばを講演で使われたことを話すと、「そうですか、そうでしょうね」「それはことばになっていないけど、底に流れている。詩はそこから生まれているところがあり、それを目指すというところもあります。」と言われた。

「最近、詩の物語性に興味があると現代詩手帳の対談で発言しておられ、「臨死船」なども書いておられますが、どうして物語性のある詩を書かれるようになったのですか」と聞くと、「物語は詩の対極にあるものですね」と言って、笑いながら、「小説ばかり売れているからです。人は物語に興味があるのです。詩は拡散してファッションとか広告に征服されちゃっている」。

詩の拡散については、アーサー・ビナードさんも中四国詩人会・山口大会の講演で同じことを語られた。

「詩が何故読まれないのか。コピーライターによる宣伝、広告に詩があふれている。詩のようなことばがいっぱいある。毎日そういうことばを浴びている。中也が一生で聞いた宣伝を一日で聞いている」

詩が、限りなく散文化していくのは、見えない精神的なもり、物質や経済、科学性が重視される時代状況の反映でもあり、流れを止める力は詩にはない。歌に限りなく憧れながら、散文に近づいていくのは現代の詩の宿命かもしれない。

そういう中で、物語性を持った詩は、一つの可能性があると思う。脳生理学によれば、記憶に強く残るのは第一に図柄や絵で、その次ぎが物語だという。散文構造の家に詩を持ち込む。谷川さんの「臨死船」には、そんな魅力があった。

詩の物語性については、もっと聞きたかったが、残り時間が気になり、話題を変えた。

右脳で書く、詩はフィクション

「自分の詩を知的か情的かと聞かれたら、どう答えられますか」と尋ねると、ちょっと考えて、「知的でしょうね」という答えが返ってきた。ちょっと間を置かれた時の目の動きが印象に残った。

二者択一で単純化を迫るのは、失礼で残酷な質問だと分かっていたのだが、イタズラ心が急に顔を出し、言葉になった。答えは予想通りだった。

「詩は左脳で書いては絶対だめ」と明確に語る谷川さん自身の詩が「情的」ではなく「知的」なのは矛盾している。

しかしここに、谷川詩の不思議な魅力と独自性が生まれる秘密

がある。谷川さん独自の「情濾過装置」を経てことばが生まれてくるのだ。その装置は、あらゆる要素で重層的にできているが、知とともにフィクション創造力も重要な働きをしている。

「情と知」が美事にブレンドされて高級醸造酒になっているのが谷川さんの詩だが、それを生み出すのは、「知」の力ということだろう。(と、ぼくは考えた)

詩「さよなら」の朗読をお願いすると、

「最近死について書くことが増えましたね」「詩はフィクションだと思っています」ときっぱり前置きをして、「自分とさよならする詩」を朗読された。

瞬間と歴史性、言い足りない方が

詩「夕焼け」には、谷川さんの詩の本質に近い鍵があると思っていたので取り上げる予定だったが、残り時間が少なくなり、一前半を省略して朗読し、質問した。

(次は詩の最後の部分)

詩が無意識に目指す心理は小説とちがって
連続した時間よりも瞬間に属しているんじゃないか

だが自分の詩を読み返しながら思うことがある
こんなふうに書いちゃいけないと
一日は夕焼けだけで成り立っているんじゃないから
その前に立ちつくすだけでは生きていけないのだから
それがどんなに美しかろうとも

最終連の「こんなふうに書いちゃいけない」ということばに、谷川さんの共生感や奥深い優しさを感じて胸を打たれます、と感想を述べて質問した。

「なぜこういうふうに書いちゃいけない、と思うのですか」

「詩は瞬間のものであると同時に歴史性も考えないといけないという意識があります」

ドイツや日本の戦争責任の受けとめ方や民族性などについても語られた。

「日本人は俳句・短歌国民だから、言い過ぎより言い足りない方を好む意識がどこかにある」

「十代の頃から詩やことばに疑問を持ってきた。それで書き続けられたのかもしれない」

それぞれの言葉に奥行きがあり印象に残った。

劇研「空」の朗読について

朗読のプロでもある谷川さんの面前で、本人の詩を朗読ー厚顔無恥力か蛮勇力が必要である。しかし劇研「空」のメンバーには、そんな能力を備えた者はいない。では何故引き受けたのか。

劇研「空」平成十二年に発足以来、劇も上演してきたが、創作劇や創作民話や詩の朗読にも力を入れてきた。文芸フェスタでの朗読のことを話すと、教科書で習っていた者や大学の教材で習った詩集を持参した者、日ごろは多忙で欠席状態だった者が、「大好きなので是非参加したい」と言ってきた。どのメンバーもやる気満々だった。

ぼく自身も、『二十億光年の孤独』や『六十二のソネット』を読んだとき、全身の感性が一気に宇宙へ開かれていく感動を味わって、大きな影響を受けた谷川詩の愛読者であった。谷川さんの前で朗読できることは夢のような光栄であり有り難い挑戦であった。こんなことがあってもいいだろうか、人生最後の贈りものかも、とさえ思った。

演劇用台本「あいう」を二人で朗読。「これを朗読するのは珍しい」と谷川さん

「余分な感情を込めず淡々と読む。しかし単調、平板にならないこと。その文脈で言葉が背後に抱えている微妙な感情や陰影を表現すること」。それが朗読の目標で、何度も練習した。

声で聞いていると分かってくるものが…

劇研「空」の朗読について、ぜひ谷川さんの感想を聞きたいと思っていた。しかし、ぼくの方から切り出すつもりはなかった。対談相手のぼくは、劇研「空」の代表だから、六百人のお客さんの前で聞けば、オシツケやヤラセの色を帯びる。

しかし、嬉しいことに谷川さんの口から感想の言葉が出て来た。深遠な配慮が働いたのかも知れない。

「いろんな方が声に出して読んでくださって、分かってきたことがあります。自分の詩が」

「声で聞いていると分かってくるものがあってうれしかった。あ

あ、そうだったんだと」

「東京などで役者が読むと、芝居のセリフになっちゃうことがあるけど、淡々とだけど、しかも何か気持ちを込めてもらうと感動します」「演劇的に工夫しているところもおもしろかった」

朗読直後にこのような言葉を聞いて、胸が締め付けられる思いがした。そのことを目標に練習し、それが谷川さんに伝わっただけではなく、声で聞いていて、「自分の詩が、分かってきたことがある」と言われたのである。それは、どの詩かについては、ぼくには推測できるが、ここでは省略する。

予定時間オーバーのサインが隣の川辺さんから出たので、「ここでみなさんにサプライズを披露します」と最後へ飛んだ。谷川さんは、「二日前に手紙がきました。相当きつい〆切だったんです」と会場を湧かせて、新作を披露、朗読された。

題は、「詩は」。「島根」「松江」両方の音を行頭に置いたアクロステック。

詩は　　谷川俊太郎

詩はつくるものではなく生まれるもの
真正面から日々を生きていれば
眠りのうちに未知の言葉に恵まれる

待つしかない
束の間の詩の訪れを
永遠からの意外な伝言を

＊アクロスティック＝しまね　まつえ

島根か松江に関する即興の詩を、前日の前夜祭の時お願いしてみよう、という話しは、九月五日に川辺、岩田、洲浜が集まった準備会で決めた。谷川さんは連句など好きで、歌題があれば即興で作られるのが特意だということから決まった。

帰宅してから、急なお願いは失礼ではないかと、ぼくは悩みはじめた。数日悩んだあげく、やっぱり事前にお願いしておこう、と直前にお願いの手紙を書いた。

どちらがよかったのか。ぼくの決断の方が、貴重な時間を奪ったのではないかと思った。持参された詩は即席でできるような詩ではなかった。大会のテーマをしっかり見据えて書かれていた。

対談の最後に「濃密な時間をありがとうございました」とお礼を言うと、

「いろいろ引き出してくださってありがとうございました。私も楽しかったです。自分の詩をこうして聞くのもいいですね」

予想しない言葉がぼくの胸を打った。

横綱の上はなんと言うのだろう。

ぼくは、対話を楽しみ、時として感動しながら、「谷川さんのことばさがし」に迫ろうと格闘した。お客さんにも喜んでいただいたことが反応から十分伝わってきた。

「いろいろ引き出してくださってありがとう」。どうしたらこんな言葉が出てくるのだろう。ここにも谷川さんの言葉が生まれる秘密がある。

大空のような手のひらで、ぼくは、全力で組み合った気がした。

谷川俊太郎体験（島根県詩人連合会報79号より転載）

閤田真太郎

二〇一五年九月二十一日の夜、私は谷川さんの隣に座っていた。Tシャツ姿で歓迎の挨拶を受け、出されたメニューは粛々と食べる谷川さん。ここ一年ばかりは一日一食とか。立ち居振る舞いは自然体、飾らず構えず、笑顔がやさしい。

翌日、超満員の会場は圧倒的に女性が多い。谷川さんと洲浜理事長の対談で始まった一時間半。劇研「空」の皆さんによる谷川作品の朗読・群読は、大画面に投影されるモニター映像の効果と相侯って、聴衆・観衆に大きな感動を与えた。対談の進行の中に適切に挟まれる谷川さんの詩。その選択と、付随する谷川さんの人間味を、引き出してゆくシナリオの巧みさに、会場の全員が引き込まれた。

会場ロビーでは多くの著作が販売されていた。人々は群がり購入している。朝のホテルから、会場へ向かう車中で、「朔太郎から始まった真太郎の詩は俊太郎で仕上げです」と、半ばは冗談、半分本気で隣の谷川さんに言ってしまった私か手にした一冊。

未知の出版社である「ナナロク社」から出された七〇〇頁を超える大冊は『ぼくはこうやって詩を書いてきた：：谷川俊太郎、詩と人生を語る』谷川俊太郎・山田馨（両氏の対談集の形式）共著。ご本人にサインをお願いしたら、さらさらと書きながら、「高価な本を……」と、仰有る。なにをおっしゃいますか、われわれ有象無象の詩集の、値段設定から比較すれば廉いものです、は口の中に呑込み、頭を下げていただく。

少年時代の「初めて書いた詩」から二〇〇九年までの三十四冊の詩集から山田氏が選んだ谷川作品を二人が率直に語り合う進行には、いささかの馴れ合いも甘えも見当らない。編集者という職業の凄さをこれほど感じさせた人を、私は知らない。人間と人間の出会いの重さ、美しさも……。いつ読んでも、どこから読んでもあの谷川さんが居る本。お迎えが来る枕頭にも多分在るだろうな。

新聞より 珍しく文芸フェスタを五紙が大きく取り上げました。その内から朝日、中国、山陰中央を紹介させていただきます

しまね文芸フェスタ

谷川さん 詩語る

「少ない言葉で大きな世界を」

詩人の谷川俊太郎さん(83)が22日、松江市の県民会館であった「しまね文芸フェスタ2015」で対談し、約550人に詩の魅力を語った。

テーマは「わたしのことばさがし」。「宇宙の始まりに比べれば、ことばの歴史はまだつい昨日」「ことばで表現され得なかった過去の存在に迫りたいのが詩だ」と説いた。大田市の劇研「空」が谷川作品を朗読し、県詩人連合の州浜昌三理事長が聞き手を務めた。

18歳ごろから詩作を始めた谷川さんは、「自分の座標を決めるのに、社会より宇宙に意識が飛んでいた」と、若いころからを振り返った。

「現代詩は意味や思想で書こうとするが、詩には、七五調のような日本語のもつ音の豊かさも必要」といい、「言い過ぎより、言い足りないくらいの感覚で、できるだけ少ないことばで大きな世界を描きたい」「戦争で傷つけた中国や韓国に対して悪いと思っていてもあやまらないことや、軍力は必要だから原発は再稼働するというようなことは、過去にこだわらなさすぎる現れ」とも述べ、「詩は通した時間より『瞬間』に、瞬間と同時に歴史のつながりも考えなければ」と語りかけた。(土屋みのり)

8校、中国大会へ

県バンドフェス

県マーチングコンテスト

第6回全日本小学校バンドフェスティバル、第28回全日本マーチングコンテスト(県吹奏楽連盟、朝日新聞社主催)の県大会が22日、出雲市の県立浜山体育館であった。小学校と高校の9校が出場し、8校が10日に同体育館である中国大会への進出を決めた。

出雲市立斐川小学校は抑揚のある演奏とチャイドレスを身にまとっての技、歌劇「トゥーランド

(中国新聞)

(第三種郵便物認可)

名作作ろうと思っていなかった

谷川俊太郎さん、創作活動振り返る

松江

「しまね文芸フェスタ2015」が22日、松江市の県民会館で開かれ、詩人の谷川俊太郎さん(83)が「わたしのことばさがし」と題して講演した。県民文化祭の一環で、県や県文芸協会、県文化団体連合会の主催。約560人が聴講した。

松江市内で講演する谷川さん

谷川さんは、「18歳の頃に友人の影響で詩を書き始めた」「音楽性が豊かな日本語の音に敏感になることを心掛けてきた」と、70年近い創作活動を振り返った。自身の作品については、「名作を作ろうと思っていなかったので、抽象的、観念的でなく、自分の生活に根差した題材が多い」と分析した。

合間には大田市の演劇サークル「劇研空」が、谷川さんの詩「生きる」などを朗読。谷川さんは「気持ちがこもっていて、自分の作品ながら感動した」と喜んでいた。

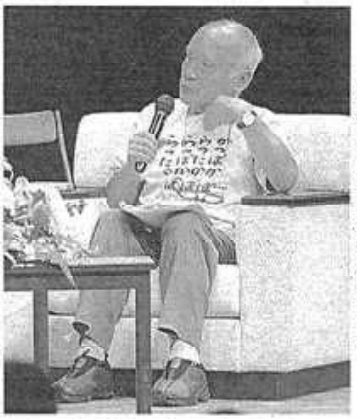
松江市黒田町の吉川英雄さん(69)は「話し言葉でも豊かな表現力が伝わってきて感心した」と話していた。

(松島岳人)

松江で「しまね文芸フェスタ」

詩の世界 魅力存分に

谷川俊太郎さんら対談



詩の魅力について語る谷川俊太郎さん

文芸愛好家の親睦を深める「しまね文芸フェスタ2015」が22日、松江市殿町の県民会館であった。詩人の谷川俊太郎さんが、少ない言葉でさまざまな世界を表現したり、日本語の音の豊かさ、面白さに触れたりできる詩の魅力を伝えた。

県文芸協会、県、県文化団体連合会が県民文化祭の一環で開き、約600人が来場。県詩人連合の州浜昌三理事長との対談形式で、谷川さんは、18歳の頃に友人の見よう見まねで詩を始めたことなど詩人となった経緯を紹介した。

大田市を中心に活躍する「劇研『空』」の6人による朗読に合わせ、作品に込めた思いや背景を解説し、「愛について」は「自身の結婚生活を基にした」、韻を踏んだ詩集「ことばあそびうた」は「宮沢賢治に影響を受けた」と語った。

詩の各行の先頭文字をつなげると別の単語になる「アクロスティック」と呼ばれる技法を使い、「しまねまつえ」の単語を表すオリジナルの詩も披露。「頭に浮かんだ言葉を並べるだけでも詩になる。難しく考えず、詩を身近に感じてほしい」と呼び掛けた。

静岡県浜松市の会社員、小橋能さん(31)は「詩に詳しくなくても楽しめた。言葉遊びの詩が印象に残った」と笑顔で話した。

(吉野仁士)

若手医師らエコー活用の診療法学ぶ

隠岐島前病院がセミナー

整形外科分野では珍しい超音波診断装置(エコー)を活用した診療方法を学ぶ総合診療セミナーが20日、西ノ島町美田の隠岐島前病院であった。全国で先駆けて同診療に取り組む医師が、県内外の若手医師ら20人にノウハウを伝えた。

セミナーは、県内で同装置を駆使した医療を実践する隠岐島前病院が企画。城東整形外科(秋田市)の皆川洋至診療部長、弘前大学医学部付属病院(弘前市)総合診療部の小林只助手、隠岐島前病院の白石吉彦院